

伝統的知識の公開と 「社会関係資本」としての活用

UKにあるマンロー書簡の社会ネットワーク分析を中心に

Publication of Traditional Knowledge and Utilization as "Social Capital" : With a Focus on the Social Network Analysis of the Munro Correspondence in UK

手塚 薫

TEZUKA Kaoru

はじめに

- ① 学術情報公開への道
- ② 従来のマンロー研究
- ③ 社会ネットワーク分析の特徴
- ④ 社会ネットワークグラフとネットワーク密度
- ⑤ エンパワーメントの源泉としてのマンロー資料

おわりに

【論文要旨】

マンローのアイヌ研究がどのような動機や目的に基づいて実施されたのかについては、これまで、本人の性格や思想を推測して考察することが一般的であった。純粋な知識欲以外にもアカデミズムへの貢献といった名誉欲などの要素を度外視することはできないが、公刊資料からだけでは、動機の解明にいたることは困難である。

RAIやNMSに所蔵されているマンローと第三者間でやりとりされた私的な書簡類は、マンローのアイヌ研究の目的や意図を正直に伝えているものが多く、それらを理解する上ではかりしれない価値を有する。マンローのアイヌ研究成果を、現代的な活用に耐えうるものとして取り扱っていかどうかを判断するためには、当時の研究対象となった人びととの関係性や研究倫理など、それらが産み出された経過を正確に把握する必要がある。

研究対象地域やコミュニティ内外の人物と実際のところどのような関係を構築していたかは、マンローのアイヌ研究の質と量にも大きな影響を与えたと考えられる。そこでマンローと彼を取り巻く人物との関係を理解するために、上記の書簡を元にエゴセントリック・ネットワーク分析をおこなった。その結果、ネットワークの密度、中心性、ハブとなる人物、アイヌインフォーマントとの関係、コミュニティ内外の多くの人物からの影響などの特徴が浮き彫りにされた。これらの結果は、マンローのアイヌ研究がマンローの個人的な資質および属性からだけではなく、マンローを取り巻く様々な人物のネットワークによって駆動されていたことを視覚的かつ実証的に説明している。

マンローによって収集されたアイヌの伝統的民族知識を、名誉・人格権・プライバシー権などを十分考慮しながら公開していく在り方が問われている。社会ネットワーク分析による研究成果はそれらのデータを、アイヌ民族を含む現代人が社会関係資本として積極的に活用する上で大いに資するものと考えられる。

【キーワード】 アイヌ、マンロー、伝統的民族知識、社会ネットワーク分析、社会関係資本